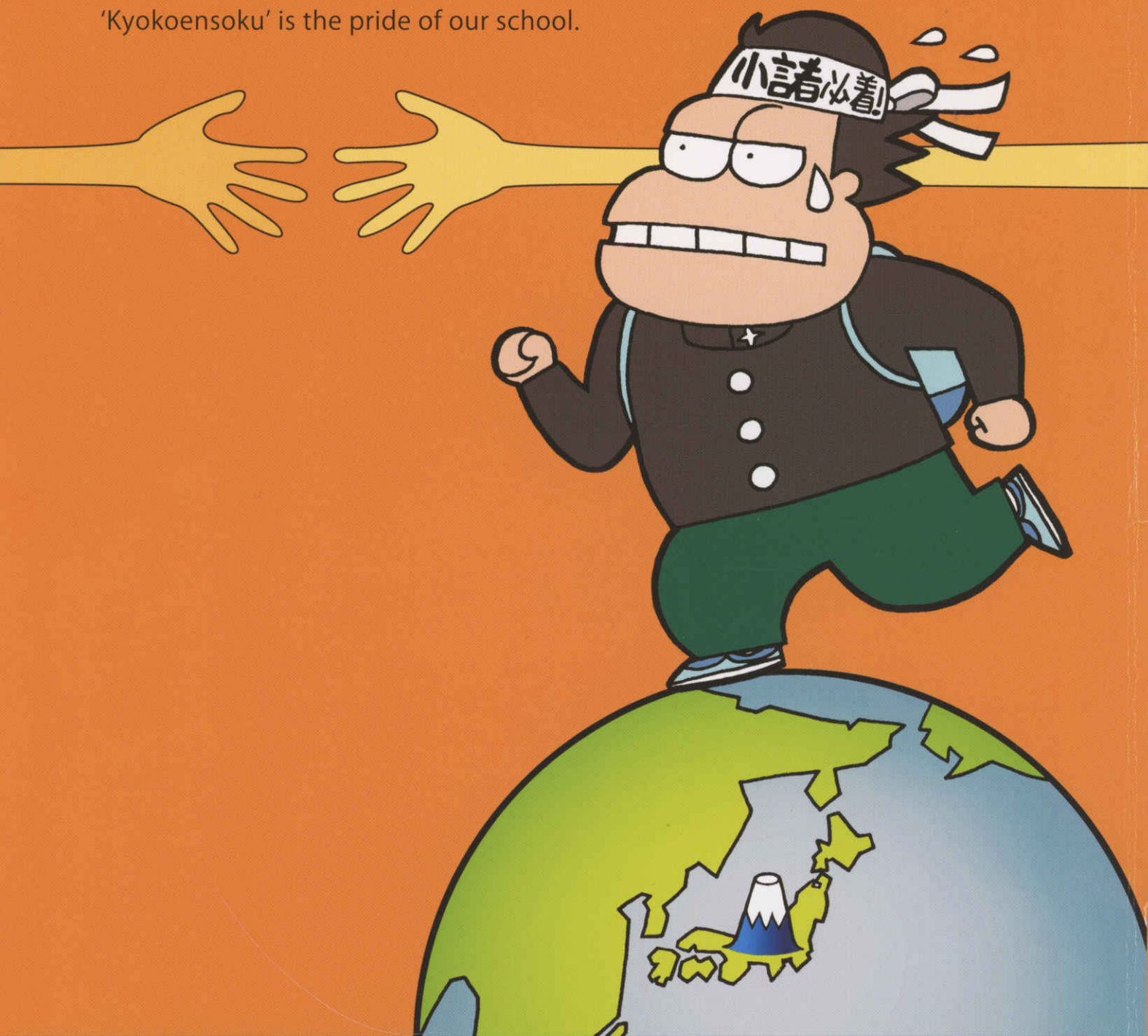


TO THE WORLD TO THE FUTURE

世界へ! 未来へ!

'Kyokoensoku' is the pride of our school.



54 甲府中学・甲府一高 創立133周年
th 東京同窓会記念誌 Vol.20

日新誌

山梨縣立甲府中學校校歌

三井 甲之 作詞
東京高等音樂學院 作曲

一、我等は日本に生まれたり

神の御代より一系の

皇統戴く我國に

生まれしことのうれしきよ

皇國の榮えは天地と

共に窮りなかるべし

二、大和島根に山めぐる

甲斐の國あり水清き

郷土の歴史顧みよ

我等の務め輕からず

見よや南に富士ヶ嶺は

皇國の鎮めと聳えたり

三、大海原の揺りやまぬ

波をも風をも凌ぎつつ

護れ皇國を諸共に

國民舉りて國のため

撓まず萎縮まず辟易がず

進むぞ大和のこころなる

山梨県立甲府第一高等学校校歌

昭和23年10月22日制定
上条 馨 作詞
小松 清 作曲

一、甲斐の國 み中に建ちて

古へゆ 雄心伝へ

新しき 世の鑑とし

勉めてむ この学舎に

二、日に新た また日に新た

弥高き のぞみをもちて

真なる 理究め

励みなむ 若人我等

三、聳え立つ 芙蓉の高根

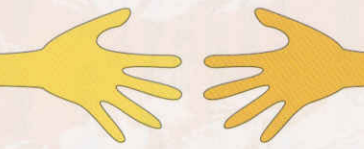
清き哉 甲斐の山川

もろともに 玉と磨きて

賛くべし 天地の化育

世界へ！未来へ！

TO THE WORLD TO THE FUTURE



我らが強行遠足は甲斐の国の誇り

メインテーマ「世界へ！未来へ！」

“Boys, be ambitious ! ”

札幌農学校クラーク博士の言葉として有名ですが、この言葉を世に広めたのは、実は我が母校の第7代校長で愛弟子の大島正健先生だそうです。この精神を胸に世界各地で未来の可能性にチャレンジしている同窓生が数多くいます。

今年は、世界を舞台に活躍している同窓生の何人かを紹介、その方々から頂いたメッセージを掲載しました。異文化と触れ合う中での得難い経験、新鮮な見方は私たちにとっても大事な宝だと思います。



“Boys, be ambitious like this old man ! ”

これが、名言の全文だと言われています。大人 (man) の大志とは、ただ夢見ればよかった若人 (boys) とは違い、長い経験を経て酸いも甘いも噛み分けた上のものであり、失望やあきらめ、喪失、病や死を受容した後の未来像かもしれません。人生80年の時代、未来を志向する精神は、実は私たちにとって、より大切なのだと感じます。

少子高齢化などの懸案は山積、東日本大震災復興も遅々として進まぬ一方、眼前の政治・経済・国際情勢は目まぐるしく変化しています。社会と個人の生活・人生が大きな転換点に至っていることは感じつつも、不安と期待が交錯し、将来像を見出だせずにいる日本。しかしこのような時代だからこそ、大人の分別と大志を持ち、世界へ広く目を開き、未来をしっかりと見据えたい。これが、今年のメインテーマに込めた、私たちの願いです。

東京同窓会は旧交を温めるだけでなく、新たな出会いを発見する場でもあります。「新たな出会い」は、これからの人生や未来をきっと彩り豊かにしてくれると信じます。世界へ、未来へ、一步を踏み出しませんか？

サブテーマ「我らが強行遠足は甲斐の国の誇り」



甲府一高の伝統を継承し未来へ繋げましょう

我が母校の代名詞でもある強行遠足。悲しい事故から10年、一時大幅な距離の短縮を余儀なくされましたが、ついに今年、男子の終点が再び小諸まで延長されることになりました！

この良き伝統を、さらに「未来へ！」継承するために、我々に何ができるのか？今回は、色々な角度から強行遠足を見つめ、考えてみたいと思います。

「日新鐘」に寄せて



東京同窓会会長

井上 幸彦

(昭和31年卒)

東日本大震災の発災から二年余が経過した。今尚行方不明者の数が二、六〇〇人を超えるという。避難所生活を余儀なくされている人も数多く、復旧、復興の歩みが遅いことがもどかしい限りだ。

去る二月十一日には、政府主催の「東日本大震災追悼二周年式典」が執り行われた。

御臨席された天皇陛下は、被災された「人々のことを私どもはこれからも常に見守り、この苦しみを少しでも分かち合っていくことが大切だ」との思いを新たにしています。」と述べられている。被災地の一日も早い復旧、復興を祈りつつ、我々もこうした陛下の思いを持ち続けて行くことが肝要である。

ところで岩手県陸前高田市の「高田の松原」も大津波に襲われ、一瞬にして松林が消滅してしまったが、一本の松だけが奇跡的に残り、その凛とした姿が被災者に勇気と希望を与えることとなった。残念ながらこの松も海水につかったことから枯死してしまった。

しかし地元の人々が中心となってこの松を後世に語り継ぐため長期的保存に耐えるよう加工処理して元の位置に建植されるに至った。「奇跡の一本松」が姿を変えたとはいえ、現地に在って震災のシンボルとして語り継がれることは大変意義深いものがある。

そう一高のシンボルといえば、あの「日新種」と強行遠足ではないか。母校を懐かしむ時、必ずこの二つが甦ってくる。今年の東京同窓会のサブテーマは、「我々が強行遠足は甲斐の国の誇り、甲府一高の伝統を継承し未来へ繋げましょう」だ。

この度の同窓会の場合、一高のシンボリックな強行遠足に思いを馳せながら、新しい出会いの機会になることを切に願う次第です。

ごあいさつ



甲府第一高等学校校長

奥田 正直

平成二十五年度甲府中学・甲府一高東京同窓会が盛大に開催されますことに心よりお祝い申し上げます。また、東京同窓会の皆様には、日頃より本校発展のために多大なる御支援、御協力をいただき心より感謝申し上げます。特に、「同窓会奨学金」への御寄付は、生徒の学業、文化及びスポーツ活動への大きな支えとなっております。重ねて御礼申し上げます。

さて、昨年度の母校の状況について簡単に報告しますと、進路面では、国公立大学合格者八三名、私立大学合格者四七一名という結果でした。また、部活動では、アーチェリー部がインターハイ二年連続入賞を果たし、山岳部女子もインターハイ初出場ながら十五位と健闘し、文化局も全国総文祭に新聞部、囲碁将棋部、美術部が出場し、文化連盟賞を受賞しました。さらに、「高校生による国際交流コンクール」や「方代の里なかみち短歌大会」でグランプリを獲得するなど、自主的な活動も活性化しています。

今後も、生徒の多様な可能性を伸ばす教育を押し進め、「文化の香りがする懐の深い進学校」を目指して、教職員一同努力して参ります。また、今年の強行遠足は、念願の小諸復活を果たしました。

東京同窓会の皆様には、変わらぬ御支援、御協力をお願いするとともに、益々の御発展と御健勝を祈念いたします。

「世界へ！未来へ！」



平成25年度幹事長

軽石 泰孝

(昭和50年卒)

第五十四回甲府中学・甲府一高東京同窓会の開催に当たり、本日ご出席頂きました同窓生の皆様をはじめ、同窓会誌「日新鐘」に広告掲載や協賛金をご協力頂きました皆様や、我々当番幹事の企画に何かとご配慮頂きました母校の先生の皆様、その多大なご支援と応援に当番幹事一同心より感謝申し上げます。

さて、今回は「世界へ！未来へ！」をメインテーマとして掲げることにいたしました。現在の日本は、遅々として進まぬ東日本大震災復興に象徴されるように、様々な問題や課題が混沌とした状況の中にあり、国も組織も個人も将来の姿を必死に模索しているのではないのでしょうか。この様な時代だからこそ広く世界に目を向け、そこから見えてくる我々の未来の姿を考えることが出来ればとの思いを込めました。

また、サブテーマを「我々が強行遠足は甲斐の国の誇り」とし、甲府中学・甲府一高の良き伝統である強行遠足を、その精神と共に未来に伝えて行きたいと考えました。「日新鐘」では、そのために我々同窓生として何が出来るかを考えようとの趣旨で、強行遠足の舞台裏にスポットを当てた企画を掲載しました。

懇親会では、本校OB・OGを中心に結成された「第九を歌う会」の皆様の美声と、同じく本校OBの鏡味仙三・仙花ご夫妻による伝統芸能「夫婦太神楽」を披露して頂くことになっております。また、昨年の強行遠足のスライドショーも上映の予定です。存分にご堪能下さい。

本日は、多くの同窓生と旧交を温めて頂き、また新たな出会いの場として頂ければ幸いです。

世界へ！未来へ！



校歌

テーマ「世界へ！未来へ！」	1
ごあいさつ	2
目次	3

メイン特集 世界へ！未来へ！

世界で認められるワイン“甲州”へ	三澤 茂計	4
日中のささやかな懸け橋として	青柳 雅彦	6
ホーチミンにて想うこと	北村 聡一郎	7
カリフォルニアの青い空の下で	ワシントン 伸子	8
会話に見る文化の違い	伊東 武彦	10
パリに留学して	渡井 葉子	11
甲府一高ありがとうございます！	ケイト・バロー	13

サブ特集 我らが強行遠足は甲斐の国の誇り

強行遠足を支える人々 裏方奮闘記	14
こぼればなし ～強行遠足のお守りの慣わしはいつ始まったのか～	16
強行遠足 コースと距離の変遷	17
強行遠足実行責任者 中澤先生に聞く	18
OB強行遠足に参加して	19

一紅会

若い世代の力で 更に前進を！ 会長 谷口 百合子	20
一紅会歴史研究同好会の窓から	20
春の講演会「子ども達に活かされて ～共に歩む小児科医の夢～」	21

甲府一高この一年

♪～まわる回るよ時代はまわる～♪ 当番幹事・在籍時のできごと	25
私の近況 恩師の方々から	26
東京同窓会HPのご紹介	27
100字私の近況・同窓生編	28
広告目次	30
懇親会イベントのご紹介	60
幹事のひとこと・日新会ゴルフコンペのお誘い	61
幹事名簿・編集後記・表紙のことは	62

世界で認められるワイン

「甲州」へ



三澤 茂計（みさわ しげかず）山梨県勝沼町生まれ。甲府一高卒業後、東京工業大学に入学。三菱商事に10年勤務して家業である中央葡萄酒を継ぐ。輸入ワイン攻勢一辺倒の中、日本固有種甲州ブドウの将来を危惧して勝沼ワイナリークラブを設立。世界の適正なる市場を求めてEU向け「甲州」輸出プロジェクトの委員長に就任。

今年のメインテーマ「世界へ！」にふさわしく、日本のワイン「甲州」を世界標準にするべく奮闘されている中央葡萄酒株式会社（グレイスワイン）社長の三澤茂計氏（昭和四十二年卒）にお話を伺いました

日本でのワインづくりは、一八七四年に甲府で始まりました。甲州種ブドウが白ワイン用原料となりました。しかし、この頃はまだブドウの果皮にある酵母の存在を認識していなかったため、日本酒を応用して麦麹で発酵させるような状況でした。明治政府の国策の恩恵で高野正誠、土屋竜憲の二人がワインづくりとブドウ栽培を学ぶため渡仏し、二人が帰国した一八七九年以降本格的なワインづくりが勝沼で始まりました。

中央葡萄酒株式会社は、一九二三年に曾祖父が創業しました。（三澤社長は、はじめ商社に十年間勤められそれから実家の中央葡萄酒に入りました。）最初からワインを手掛けなかったことは廻り道かも知れなかったが、商社にいたことが世界へ目を向ける一つのきっかけだったかもしれません。

初めてのワイン輸出は、先代の時代に日本海溝の調査に当たったフランス海軍への提供でしたが、これはその時だけのもので、恒常的な輸出ではありませんでした。

私も小ロットでの輸出を何度かしました。輸出によって売上を確保するというより輸出したという実績を持つて

国内で知られたという目論見もありましたが、いまはもろろんそうではなくて本格的な輸出です。アジアで随一のオリジナリティのあるワイン用ブドウである「甲州」（二〇一〇年にはOVI＝国際ブドウ・ワイン機構に登録された。）をグローバルな世界で認められるようにしたいと思っています。

世界に目を向けたきっかけは、一つには食の嗜好の変化というものがありません。和食のような繊細でヘルシーなものが世界的に好まれるようになった、そうであればそのような食事に合うワインが求められるのではないかと。もう一つは、国内市場の縮小という問題がありました。この点からも海外展開の必要を感じるようになりました。

海外進出といっても、無論簡単にできるものではありません。ワイン造り後進国の日本のワインをどのようにして認めてもらえるか。以前は「甲州」を持つていても特に興味をもたれることなく、飲んでみようとと思われるませんでした。今では、世界のワインの醸造家で「甲州」という品種を知らない作り手はなく、ワインを見せると、前からぜひ飲んでみたいと思っていたと非常に興味を持たれるまでになりました

た。現在ではドイツやフランスでも甲州が栽培されています。また、リースリングに替えて雨に強い品種の甲州に変えようという動きです。

世界に知られるためには、ロンドン市場で認められることが重要です。なぜならばロンドンではワイン情報の七割を世界に発信するいわゆるハイエンドの市場です。またロンドンにおけるジャーナリズムは、社会的責任を重視しているために、ワインの質の評価という点において信頼性が高く影響力が非常に大きいのです。ロンドン市場で認められるための苦労があります。その一つが知名度のあるフランスワインと同じ時期にプロモーションしないという工夫が必要です。時期をずらして目立つようにする。しかし、次第にフランスワインのプロモーション期間が長くなり時期の設定が難しくなりました。最近ではフランスのワイナリーとプロモーション期間調整ができる場面も生まれるようになりました。それだけ「甲州」が認められてきたということでしょう。

先程食の嗜好の変化といいましたが、その変化に伴って新しいカテゴリーのワインを作り出し、「甲州」の

ブランディングを進める必要があります。強引に進めても日本ワインを認めてもらうことはできない、マーケティングを考えなければなりません。そのためには我社一社だけではできません。グループを作って進め山梨という産地も併せて訴える必要があります。そのため同じ想いを持つ山梨の十五社が集まり甲州ワインの輸出プロジェクト「Koshu Of Japan」(KOJ)を結成してヨーロッパを目指しました。全社にロンドンにおけるプロモーション活動の重要性を理解してもらいました。

といっても品質を保つという問題もあり、どの会社も参加でき、しかも品質のレベルは厳しくするという方針で臨みました。

このような努力により、「甲州」は、ヨーロッパのみならず東南アジアや中国市場からも引き合いがあるようになりましたので、さらにロンドンでの活動を通じ「甲州」が世界で通用する日本を代表するワインとなることを目指していきます。

強行遠足のこと

三澤社長には、在学中の強行遠足の思い出も伺いました。

私が二年生の時、今までの中込から小諸に距離が延びました。それが嬉しくて二年生の時は小諸まで行きました。

翌年、三年生のときは入試を考え韮崎でやめました。今思えば三六五日の中の一日、しかも私の場合大学入試に失敗して一年浪人したのですから、韮崎でやめた意味はありませんでした。もっと強行遠足を大事にしておけばよかった。今になればそう思います。

インタビューを終えて

長時間にわたり、三澤社長からお話を伺いましたが、その中で一貫して流れていることは、「甲州」に対する愛着と、また困難は多くとも必ず世界に通用するという強い信念であるということを感じました。世界のスタンダードとして、いたるところで特別な日に合わせるワインが「甲州」といわれるような日が来ることを私たちも願ってやみません。

物江 芳明 (昭和五十年卒)
保坂 香子 (平成三年卒)



グローバル化しているワイン市場を背景に、日本ワインも真価が問われる時代を迎えた。世界のワイン法の規範であるEU規格を適用したワイン醸造が、日本でも現実の世界になっている。ブドウ栽培に注力し、2002年に三澤農場を開園。ドメーヌに相応しい12haに達する本格的規模に達する。写真は収穫直後のメルロ種ブドウ。

日中のささやかな

懸け橋として



青柳雅彦（昭和五十年卒）



旅先のモンゴル自治区の草原にて

星落秋風五丈原。この響きの何と素晴らしいことか！

私が中国に思いを馳せるようになったのは、三国志の歴史ロマンを「数学」の土屋先生が詩吟の歌声に載せて授業中に披露してくださった時だ。

諸葛孔明が出師の表を表し、劉備玄徳の遺児を支えて魏国との決戦に赴く時の心情や戦いの風景を、土屋先生は感情を込めとうとうと歌い上げてくださった。

広大な中国の平原に遂に巨星落つ。何と勇壮でロマンチックで、もの悲しい物語だろう。

高校二年生の頃の、国語ではなく数学の授業での風景である。

この中国の歴史舞台の光景は、その後も常に私の頭の中に画像として残り続けていた。

私は歴史が大好きであり、世界史の金丸先生の中国史にも惹かれた。

また、国語の伊藤先生の中国漢詩も、色鮮やかな風景と共に私の中に広がっていた。

春望、垓下の詩、江南の春、江楓夜泊。こうした甲府一高での授業を通じ、私の中国への憧れが育まれてきたように思う。

その後、私は商社に就職し、これまでに台北、上海、北京に駐在してきた。

その間、私は出張や旅行で中国各地を数多く訪問し、中国の自然や歴史に多く触れる機会に恵まれてきた。

しかし日常生活では、こうしたロマンとは程遠い「現実」に直面してきた。特に近年の日中関係悪化による出来事は残念でならない。

二〇〇五年と二〇一二年の大規模反日デモは、私は上海と北京の現場で体験した。

二〇〇五年は小泉首相の靖国参拝などを巡る反日機運の爆発であった。

私は上海日本領事館近くに住んでいた。

だが、数万人のデモ隊が、日本料理店を襲撃し、日本語看板を引き倒し、日本人が多く住む私のマンションを取り囲んだあと、日本領事館に投石した。

二〇一二年は尖閣諸島の国有化宣言をめぐる大規模反日デモであった。その時も私は北京の日本大使館近くに住んでいた。デモ隊が、中国国旗を手に大使館前を占拠した。

日本料理店は上海の時を教訓に、一斉に日本語看板を中国国旗で覆い隠し、「中国支持」、「魚釣島（尖閣諸島）は中国のもの」と大書きした貼り紙を出し襲撃を回避していた。

こうした日中関係の悪化は本当に悲しい。

日本と中国は、もっともつとお互いを良く理解する必要がある。

日本は近代史をきちんと振り返り、中国の日本に対する警戒感を理解する必要がある。

中国には過去の侵略の傷あとが生々しい形で今でも残っている。北京市街を散策していると、「歴史建造物」によく出くわすが、その多くが抗日戦争の司令部跡であったりする。

その都度、私は歴史の重みを感じ、過去を謙虚に受け止める必要があることを思う。

一方中国政府も、日本への偏見を助長する過度な「歴史教育」を改めるべきであろう。

靖国問題などもその一つである。

中国人の多くは、靖国は「軍国主義の象徴、戦争指導者を祀る神社」であると思っている。

ある時、中国人の若いスタッフが東京出張に行き、靖国を実際に見てきた。帰国後、彼はこう言っていた。

「靖国神社には、戦場に向かう若い学生さんたちがお母さんに宛てた別れの詩が有りました。僕は感動しました。靖国はこういう一般の人たちを祀っているのですね。中国の寺や廟は英雄や指導者は祀りますが、庶民を祀ったものはありません。」

彼は日本人にとつての靖国神社の意味が初めて分かった、と言っていた。

一昨年、私は日中経済協会のプロگرامに参加して、東京の自宅で中国人大学生のホームステイ受け入れを行った。中国の若者たちに、ありのままの日本を見て欲しいと思ったからだ。

受け入れた学生は、農村から北京に出て勉強に励んでおり、その一途な姿勢に我々家族も感激した。学生にとつても、日本の普通の家庭や社会を身で感じてもらえたことと思う。

こうした草の根交流を通じて、等身大で相手を理解してゆくことは大切な事と思う。

私自身も中国各地の旅先で、現地の素朴な温かさに触れ、親しみを感じたことも多かった。

私はもうしばらく中国に滞在する予定である。

中国人は率直でストレートだ。一方でとても素朴で人情味がある人々でもある。

私はこれからも、こうした人々とビジネスや日常生活を通じて交流を行い、日本をより良く理解してもらえよう努力しながら、両国の友好発展に少しでも貢献してゆきたいと思う。

青柳 雅彦（あおやぎ まさひこ）

住友商事に入社後、主に生活関連産業部門で活躍。

中国・台湾勤務は、台北・上海・北京（現在）と3回、通算10年に及ぶ。

現在、住友商事（中国）有限公司メディア・ライフスタイル事業部長

ホーチミンにて

想うこと

北村 聡一郎（昭和五十年卒）



一高を卒業後に京都の同志社に入學、卒業後に入社した会社から三回目の海外勤務となるベトナムのホーチミン勤務を命ぜられ、着任して丁度三年が経過したところです。

我々が卒業した昭和五十年（一九七五年）は当時の南ベトナム（ベトナム共和国）の首都サイゴン（現在のホーチミン）が陥落し、ベトナム戦争が終結した年でした。受験浪人時代に下宿していた阿佐ヶ谷の部屋で、「朝日ジャーナル」、本多勝一などのベトナム戦争や「解放後」の南ベトナム情勢などに纏わる記事や読み物を、受験参考書などは傍らに置きやって、一生懸命、読んでいた記憶があります。当時は三十数年を経てベトナムに勤務するなど、想像さえしていませんでしたが、

本当に巡り合わせと言うか、縁は不思議なものです。前置きが長くなりました



自宅にて

たが、折角の機会を頂きましたので、当地ベトナムについて思い付くままに少々述べてみます。

ベトナムは、人口約九千万、面積は九州を除いた日本の面積とほぼ同じで、九割がキン族（南部では減多に出会う事はありませんが、約五十三の少数民族も暮らしています）、国民の八

割が仏教徒であり、気候は北部が亜熱帯性（冬は十度前後まで低下する）、南部は熱帯性（一年を通じて日中は三十〜三十五度）といった具合です。一口に「ベトナム」と言っても、私の住むホーチミンは南部に位置する最大の商都ですが、「北」と「南」では気候や風土のみならず、様々な違いがあります。

「ベトナム人」を表現する場合に、何れもややステレオタイプのですが、良く使われる言葉として「勤勉」があり、北は「しっかり者」が多く、南は「楽天的」などと評される事が多いです。

「ベトナム」を理解する上で、この「南北間の違い」を知る事は大切なポイントであり、私もハノイへは数回行きましたが、確かに第一印象として街全体の雰囲気や当地ホーチミンとは全く異なりました。南部では見る事の無いレーニンの銅像もホーチミン廟の近くに立っていますし（生まれて初めて見ました）、また南部では余り感じる事はありませんが、ハノイ中心部に広大な敷地を構える国軍の威容も改めて強く感じました。

歴史的にも大きく異なりますが、実は「北」と「南」といった区分に留まらず、歴史的な変遷としては「中部」も重要な地域となります。北部は紀元

前より千年以上に渡り中国よりの侵攻に脅かされ続け、一方で南部は旧くメール帝国の強い影響を受けました。が、ほぼ同時期に中部ではキン族ではないチャム族によるチャンバ王国が荘厳なヒンズー文化を築いていました。ベトナム中部には、この遺跡が今でも多く残っていますが、やがてキン族の侵攻により衰退して行きます。少々飛んで近現代に至りますと、十九世紀後半にフランスの植民地となり、日本軍による侵攻、フランスとの独立戦争、その後の南北分断、また一九六五年の米軍直接介入（北爆開始）に始まる悲劇的なベトナム戦争など、月並みな表現ですが、正に筆舌に尽し難い艱難辛苦、分断の歴史をベトナムの人々は積み重ねて今日に至っています。ベトナムやベトナム人気質を考える上で、ステレオタイプのな表現の背景に、日本とは比較にならぬ程、この混沌とした侵略と抵抗の歴史に思いを馳せぬ訳には行きません。

私が今、この原稿を書いている四月三十日は解放記念日（南ベトナム解放戦線により旧サイゴンが無血陥落した日）で明日五月一日のメーデーと連休になっています。特に四月三十日の今夜は午後九時から花火大会が開催されるため、サイゴン河沿いにはおびただしい数のバイクが終結し、多くの家族

連れや恋人同士で大混雑となっていてます。一人住まいのアパートの部屋で、当地の歴史に思いを馳せつつ、ビルの向こう側で鳴り響く花火の音を聞いていますと、あたかも高射砲の砲声かのように聞こえて来しました。

二〇〇八年の国際金融危機以降、全般に経済成長の停滞が続き、依然として数多くの非効率な仕組みも内包するなど、引き続き厳しいマクロ経済運営が求められる状況ですが、当地で現地法人を経営する者として、この国の経

済発展と人々の幸福を願って止みません。

北村 聡一郎
（きたむら そういちろう）
住友林業に入社後、主に木質パネル・建材部門で活躍。
海外勤務は、インドネシア・ベトナム（現在）と3回、通算10年以上に及ぶ。
現在、住友林業海外現地法人
Vina Eco Board 社 社長

カリフォルニアの

青い空の下で



ワシントン 伸子（昭和五十年卒）

日本にいたら会えなかった私

日本にいた頃、絶対にやりたくなかった二つの事——①車の運転②コンピュータで仕事をする——

二〇〇一年六月、アメリカ、ロサンゼルスに移ったとき、それまでスイッチオフにしてあった事をオンに切り換え、その二つの事が日常生活の大半を

占める生活に一転。LAでは車はまさに足。アクセルとブレーキの区別もつかなかった私が、四回のパーソナルレッスンを受け、免許を取り、その翌日（はじめてハンドルを握ってから約十日目）から子どもたちの学校の送迎をしていました。今振り返ってみても恐ろしい話ですが、火事場のバカ力とはまさにこの事かと実感しました。

第二の難問、コンピュータ嫌いの私
が、インターネットマーケティングの
分野で、SEO(検索エンジン最適化)
をスペシャリティとして働いているの
も、そのバカ力の一つといえるでしょ
う。おかしなもので(おかげで)どこ
に住んでいても、コンピュータがあれ
ば、家で仕事ができるという恵まれた
状況になりました。

二か国語で授業、 ユニークなスクールプログラム

さて、アメリカに移った当時、次男
は小学校の最高学年(五年生)。ラッ
キーな事に International Language
Immersion Program (イマージョン・
プログラム) といって、英語だけでは
なく、他言語も使って授業や学校生活
を行うユニークな公立学校があるのを
知り申し込むと、日本語が母国語(そ
の当時は日本から来た児童は息子の
み)という事もあり、喜んで入学させ
てもらえました。

午前中は、日本語(スペイン語のプ
ログラムはスペイン語)で授業。午後
は英語で授業。先生は完璧なバイリン

ガル。はじめ英語があまり分からな
かった息子にとって、本場の日本語を
教えてあげることができた事は、大き
な自信につながったと思います。言語
だけではなく、様々な文化を自然な形
で学ぶというこのプログラムは、とて
も人気があります。残念ながら、アメ
リカでも数は少なく、また幼稚園、小
学校のみです。

日本の信頼を築いた

日系アメリカ人

一年だけでしたが、親同士の交流の

なかで印象的
だったのは、
日系人(二世)
から学んだ事
です。多くの
日系三世は日
本語が話せま
せん。彼らの
親や祖父父母
の世代が、戦
争中日系とい
う事だけで、そ
れまで築き上

げてきた全てを奪われ、戦後も大変な
苦労を強いられたためですが、自分た
ちが親になって、やはり子供たちには
自分のルーツである日本の言語や文化
を学んでほしいという思いが強くなっ
たと聞きました。学校のイベントで一
番積極的なのは、日系人の保護者(親・
祖父母等)。皆とてもまじめで働き者。
英語で会話をしていますが、日本にいる
日本人より日本人(古き良き)を思わ
せます。世界で広く活躍する今の日本
があるのも、外国で苦労を重ねながら
も、まじめに日本人の信用を築き上げ
てくれた日系の人達のおかげなんだ
と、あらためて感謝する気持ちでいっ



サンフランシスコ名物、ケーブルカーに乗って

ばいです。先日、テレビで同性愛者の
結婚を合法とするか否かという問題
で、ある日系団体の代表がこう話して
いました。「これは私たち日系人が戦
争当時受けてきた差別と同じであり、
人は皆平等であるという原則をもって
判断されるべき事である。同性愛者の
結婚を認めないという事は、すなわち
人権侵害である。」同じマイノリティ
として苦難を乗り越えてきた人の真の
言葉として強く印象に残っています。

多様な住民が魅力をつくる街

さて、二十二年前に訪れ、一目惚れ
した街、ここサンフランシスコに移っ
て四年。古く美しい建築物も多く残り
(私のアパートも築百年以上)、交通も
便利。排気ガス0のバスや、レトロな
路面電車も街中を走っています。(そ
の昔、甲府の街も小さな市電が走って
いたと母から聞いたことがあります。)
街中をのんびり走るエコフレンドリー
な電車やケーブルカーは、街の住民だ
けでなく観光客をたくさん引き寄せる
人気者。消費税、家賃など、他市に比
べ高め。でも最低賃金はアメリカ国内

で一番高い（十ドル五十五セント）。市独自のヘルスケアシステムがあるなど革新的。アクティビスト／アーティストも多く住む。何か、いつも動きを感じさせます。小さな街の中、多民族、同性愛者等の多様な住民が醸し出すバラエティが街の大きな魅力となっているSF。日本もこれから色々な国の文化が根づいてくれば、さらに魅力的に、また様々な問題を打ち破るきっかけになるのでは・・・。

外国に住んで、増々「日本の美しさ」に魅了されていく私。今、ここで私が日本のために何ができるのか、考える今日この頃です。外では中国の新節を祝う爆竹が炸裂しています。どうぞ平和な良い年になりますように。日本の大好きな友人たちへ感謝と愛を込めよう。Happy New Year!

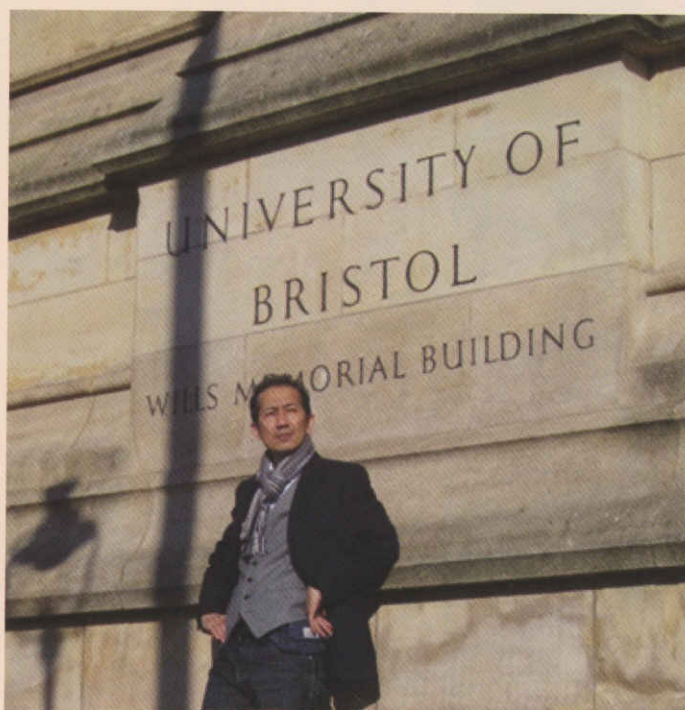
ワシントン 伸子（旧姓白井）
（わしんとん のぶこ）
2001年に渡米し、現在はサンフランシスコ在住。
IT関連の仕事に従事している。

会話に見る文化の違い



伊東 武彦（昭和五十年卒）

英国ブリストル大学教育学大学院の客員研究員として、異文化間コミュニケーションの研究を進めています。ブリストルはロンドンから西へ一七〇キロに位置する港町です。緯度が高く、夏は夜十時近くまで野外活動ができるほどの日の長さです。人々は五時に仕事を終えた後、各種のアクティビティに打ち込みます。ジョギング、サッカー、熱気球などのアウトドア活動、あるいは、読書、美術クラブや楽器演奏などのインドア活動です。私の隣人は、車の屋根にカヌーを乗せて出かけていきます。彼らは、仕事以外にも一つの人生を生きています。昨年の夏、ロンドンオリンピックが



ブリストル大学記念堂にて

感じます。それに引き寄せられるようにして、世界中から留学生やビジネス関連の人々がロンドンに限らずブリストルなどの地方都市にもやって来ます。雇用統計などの経済指標は必ずしも芳しくありませんが、町にはとても活気を感じます。

私が研究する異文化間コミュニケーションとは、文化背景が異なる人同士が意思疎通する際に生じる問題点の解決を模索する領域です。グローバルゼーションが進み人々が国境を越えて交流する機会が増えるにつれて、この分野の重要性が高まっています。私が特に力を入れているのは、ターン・テーキングの研究です。それは、会話の参加者の間で発言がどう行き交うかを分析します。会話の進め方は文化によって異なります。欧米の人々は、会話は互いの協力と貢献に基づく共同作業だと考え、交互に質問したり答えたりしながら会話を発展させます。ボールが絶えず行き交うキャッチボールに例えられます。このことはイギリスの生活で実感します。「週末はどうだった？」と尋ねられ、「楽しかったよ」と答えると、「何をしたの」、「どこへ行ったの」と話題を深める質問が続きます。それに答えた後は、同様の質問を相手に投げ返すことが期待されます。こうして、二人は左右対称の発言行動を見せま

す。ところが日本語では、一方が話し他方は聞き役に徹する会話がよく見られます。一人がボールを投げ終わってから次の人が登場するボーリングに例えられます。ここでは一方が「主」、他方が「従」という関係で、二人は非対称です。

この違いを実証するために目をつけたのは映画です。日本語と英語それぞれの映画に登場する会話を分析することによって、両文化のターン・テークングの特徴の解明を試みました。映画はフィクションですが、製作過程で会話のリアリティが追及され、それぞれの言語の文化的特徴が反映されるのです。分析の結果、四つのことが明らかになりました。

①一つの会話に現れる発言の平均数は、英語の会話の方が多い（英語―三八・二、日本語―二九・二）。つまり、英語の会話の方が発展し長く継続する。

②会話参加者の対称性は英語の方が高い。英語の会話では、二人の話者はどちらも質問する立場と答える立場の両方を取って対称性を見せるが、日本語の会話は非対称だ。

③フォローアップ・クエスチョン（FQ）の出現回数は英語の会話の方が倍ほど多い。FQとは、「そして、その旅で一番楽しかったのはなに？」と話題を深める質問で、英語の場合は一

つの話題をある程度深めてから次の話題に移行する。日本語の場合は、話題を深める質問をあまりしない。

④会話するときの姿勢も異なる。英語話者は相手の正面に位置して語ることが多い。日本語話者は横並びの割合が高く、二人が同じ風景を見ながら、または左右の席で同じ方向を向いて座りながら、あるいは横並びで歩きながら語ることが多い。

これらの文化的相違は、優劣や善悪の視点から評価されるものではありません。しかし、こうした違いを考えると、たとえ高い英語力があっても、それだけでは国際的なコミュニケーションに参加できるわけではないことに気づきます。違いの理解に基づいた言語行動を取ることによって、初めて相互信頼を得ることができるのです。そして、その先にこそ、互いを尊重する国際社会が実現されるのだと思います。

伊東 武彦
(いとう たけひこ)
大妻女子大学教授。専攻は異文化間コミュニケーション学。
2012～2013 年に英ブリストル大学にて客員研究員として研究に専念する。

パリに留学して



渡井 葉子 (平成三年卒)

甲府一高の生徒であった頃にメソポ

タミア（現在のイラク、シリア、およびトルコとイランの一部にあたる地域）史に興味を持ち始めた私は、大学では史学科を選び、さらにメソポタミア史専門の先生がいる大学院に進み、本格的に楔形文字を学び始めました。

メソポタミア史研究が幕を開けて以来、その主導を握ってきたのは常に西欧諸国であり、研究の中心地から遠い日本でメソポタミア史を志すためには、留学を前提に考えなければなりません。私が留学先として選んだのはフランスでした。指導を受けたいと願った先生がフランス人だったからです。当初は修士課程の一年間のみの予定でしたが、結局パリ第一大学で博士号を取得する二〇一二年の三月まで六年半ほどパリで暮らすことになりました。

最初の三年間を、広い敷地内に各国

の留学生用の寮が集合している「パリ国際大学都市」という施設にある日本館で過ごし、その後はパリ近郊の学生居住施設で暮らしました。国際大学都市では、居住者のパーティーやコンサートなどのイベントがしばしば企画され、まさに学生寮生活でした。日本館に住んでいたアルゼンチン人留学生にタンゴの手ほどきを受け、それがきっかけでタンゴにのめり込みました。趣味を見つけたことは、精神的疲労や孤独感に陥りやすい長い外国生活を乗り切る助けになりました。パリでの生活は、すでに三十歳を越えていた私にとって第二の青春であったと言っても過言ではありません（もともと最後の一年は、論文を終わらせなければというプレッシャーで、第二の青春も終わりを告げたのですが）。

苦勞も多くありました。最も重要か

つ厄介なのが、一年に一度の滞在ビザの更新です。何の問題もなく一度で終わればラッキーで、提出書類やできあがった滞在許可証を役所でなくされるなど、日本人の常識では考えられない問題がわりと頻繁に起こります。そんなとき窓口の人が誠実に対応してくればまだいいのですが、人を人とも思わない態度に傷つくことも珍しくありません。たとえ自分が悪くなくても、いくら注意していても数々のトラブルに見舞われることが少なくないのがパリなのです。

パリといえば誰もが好ましいイメージを抱くことと思いますが、実際のところ魅力的な街です。ルーブルやオルセーをはじめ多くの美術館や博物館に収蔵された貴重な文化財の数々には圧倒されます。歴史的モニュメントの点在する街を散歩するだけでも楽しめますし、また、夏の夜には公園に巨大なスクリーンが出現して映画上映会が行われたり、セーヌ川のほとりでピクニックをしたり、お金のかからない楽しみが多いのも嬉しいところです。しかし一方、住んでみると、皆が憧れるパリのイメージとは全く違う面も見えてきます。花の都も、地下鉄の駅の階段を一步降りれば、薄暗く、お世辞に



ルーブル美術館にて恩師と共に（後方はハンムラビ法典）

もきれいとはいえません。地下鉄といえば、ある路線では自動運転の最新式の電車が走っている一方、古く落書きだらけの汚い電車が走っている路線もあり、また別の路線では新しい車両に古い車両が連結されていたりするので

す。移民の人々や、様々な国から留学や働きに来ている人も多く、地区によってはアフリカ系やアラブ系、アジア系の人々がそれぞれ独自の生活文化圏を作り出して、ここは本当にヨーロッパ

なのかと疑いたくなることもあります。とにかくいろいろな人種や文化や価値観が混雑しています。異質なものがせめぎあいながら、フランス語という共通言語を介して融合し共存する、それがパリという街の魅力の一つなのだと、住んでみて思うようになりました。

こうした環境の中で、フランス的な思考ややり方に馴染み、また様々な国の友人を得て世界が身近に感じられるようになったと同時に、日本人である

自分を強く意識させられました。さまざまな社会やそこに暮らす人々を知ることが自分自身を知ることにもなり、自分自身を知ることが相手を理解することにつながる。それが海外生活によって私が学んだことです。

現在、シリア内戦、アルジェリアのテロ事件など、人々の血は絶えることなく流れ続けていますが、私たちは決して絶望せず、お互いを理解しあう努力を放棄してはならないと強く思います。

渡井 葉子
(わたい ようこ)

中央大学文学部兼任講師。専攻は歴史学、専門は古代メソポタミア史。
2005年に渡仏(留学)し、2012年パリ第一大学パンテオン・ソルボンヌにて博士号取得。



甲府一高

ありがとうございます！



ケイト・バロー

私はケイトです。出身はアメリカです。1年間日本に住む予定です。私はロータリーという組織の交換学生になりました。アメリカと日本は全く違いますから、ここに来ました。日本のほうが古いのです。文化がいっぱいです。日本の祝日や祭りは、アメリカにありませんので、とても面白いです。9月から、私は一高に通学しています。日本に来たときに、私は読めませんでした。その後の5か月間でこれを書けます。私の先生と友達には私に多くのことを教えてくれました。まだ授業が分かりませんので、自分で勉強しています。しかし、数学の授業中に私はかんぱんしています。授業はとても楽しいようですが、生徒達は一生懸命勉強しています。しかし、皆は学校を楽しんでいます。一高で私色々な経馬会をしました。私は2年生と一緒に研修旅行に行きました。私達は沖縄に行きました。旅行で私は日本の戦争の歴史、例えばひめゆりの話やほり穴の病院を学びました。また私は強行遠足に参加しました。この伝統は特別です。歩いている間に私は一高と地域社会の関係の深さを学びました。最終の目標に着いたときにいい気持ちでした。また私は基と踊りの部活を楽しんでいます。学校に慣れました。甲府一高、ありがとうございます！

Katherine Renwick Ballew (通称：ケイト・バロー)

アメリカ テネシー州ノックスビル出身 18歳

地元ノックスビルの West High School を卒業

帰国後はミシガン州にあるカラマズー・カレッジに入学予定

高校時代は CISV という国際組織のノックスビルクラブの代表を務め、様々なボランティア活動を行った。オーストリアやブラジルで行われたキャンプにも参加した。

また、高校のアメリカンフットボールマネージャーとしても活躍した。

日本の文化に大変興味があり、特に折り紙の腕前は見事で、いろいろなものを作るほか、自分で創作して作ることもできる。ジブリ映画のファンで、一番のお気に入りの「ハウルの動く城」は50回以上観たことがあるそうである。日本語を習得しようとする意欲が非常に強く、自学で学んでいるノートには漢字がびっしり書かれている。部活動にも積極的で、先日行われたフォークロック部のバレンタインライブでは、ダンス部員とともにパフォーマンスを行った。

我らが強行遠足は甲斐の国の誇り 強行遠足を支える人々裏方奮闘記

我が甲府中学・甲府一高の代名詞ともいえる伝統行事、強行遠足。この良き伝統を、さらに未来へ継承するため、我々に何が出来るのか？そんな気持ちを胸に、昨年十月六、七日、第八十六回強行遠足を取材しました。

あらためて感じたのは、強行遠足が、いかに多くの人の善意と熱意に支えられているかという事。自分が「歩く」「走る」のに精一杯だった時には見えなかった事です。

また、私たちの時代とは大きく変わった事もたくさん「発見」できた、楽しい取材でもありました。そして今年の大ニュースは、ついに男子の終点が、小諸まで再び延長されることです。

この機会に、強行遠足のコースと距離の変遷も辿って見ました。

私たち同窓生にとって「強行遠足」とは何なのか？ 一緒に考えていただければ幸いです。

まきば公園

救護給水所にて

救護担当・吉田医師（昭和五十年卒）

●生徒の調子はどうですか？

足が痛いとか、体中痛くて限界という生徒が多かったです。

でもスタートから雨で寒いのがかわいそうだったけど、不思議と熱を出したり、具合が悪くなった生徒は今のところいませんね。



●強行遠足のお手伝いは何回目ですか？

五回目になるけど、今までも病院に連れていくような生徒はいませんでした。今は靴

も良くなつて、昔みたいに血豆作っている子はいないです。昔は、石鹸水を

塗ったり、靴下を二枚履いてとか、いろいろやってたけどね。

●これまでに苦勞された医療活動は？

ありません。AEDも置いてあるけど、使うことになると困る。僕たちはいるだけで良いんです。防災用品と同じですよ。

●最後に一言お願いします

元気なので、声がかかるうちは続けようと思っています。一高にずっとかわっている感じがしてうれしいです。

救護担当・前嶋看護師（PTA）

●強行遠足のお手伝いは何回目ですか？

今年で三年目です。娘が三年生なので。

●三年間で救護が必要になった生徒は？

ないですね。足が痛いとかつたという程度です。みんな、健康に気を付けていてくれて助かります。

●看護で大変なことは何ですか？

眠気と寒気です。

あとは、子どもの頑張りを応援するだけです。



野辺山

救護検印所にて

シジミ汁係・吉田さん（PTA）

●シジミ汁担当は何人ですか？

今年、PTA女性部と有志の方で、十三名のお母さん方が担当しています。最初はその年の役員になったと





かいます。

●どんな思いでシジミ汁を？

野辺山のシジミ汁の係は長丁場なので、夜中の零時位から翌日の午後まで交代で適宜休憩をとりやっています。「頑張っている生徒と直接触れ合い応援したい、美味しいシジミ汁を作りたい」という意気込みでやっていますので、「ありがとう」と言われるとすごくうれしい。やみつきになります。

●でも、ご苦労も多いでしょう？

以前ずっと一人でシジミ汁を作っていた岡部さんが亡くなり、作り方がわからず、急遽、カップのシジミ汁を使ったこともありましたが、でも女性部の方が、伝統の味を引き継ぐと、岡部さんの奥様にも協力していただき、今年で三年目ですが、また美味しいシジミ汁を以前のように提供しています。

大変ですが、楽しくやることで、生徒に自分たちの愛情が直接伝わるので、やり甲斐のある仕事だと思います。

●最後に一言お願いします

一高のOBの方たちが、伝統として大切にしている行事に自分の子どもも参加でき、また、伝統を受け継いでいく一人になれたことが幸せなことです。この伝統を築いてくださった同窓会の方々に感謝しています。

松原湖

救護給水所にて

給水係・Aさん（昭和五十三年卒）

●何回目の応援ですか？

四回目です。私たちの学年の男性が道案内、女性が救護所の給水を担当しています。

●何が一番大変ですか？

時間が読めないですね。去年のように早い場合を想定して、早く来たけど、もう一時間か二時間遅くても良かったかな？

●後輩に伝えたいことは？

自分が歩いている時はさほど感じな

かったのですが、卒業して実感した事は、後輩にはもう少し頑張れるところまで頑張って欲しいと思います。悔いのないように。

●最後に一言お願いします

来年、小諸まで延びると聞いていますので、また、お手伝いをしないといけないですね。少しずつ、下の学年に譲っていかないと長くつながらないと思います。

案内係・青木さん（昭和五十三年卒）

●何回目の応援ですか？

今年で五回目になります。毎年、道案内をしています。

本当は、同窓会として三年連続で終



わりだったのですが、私の学年は熱い人がいて、もう少しやろうということので、二年延長してやっています。

●雨が降ったので長時間大変ですね

ここは、朝の三時から夕方四時頃まで交代しながら立つことになりました。雨を二回経験しましたが、寒いですね。零下の時もありました。可愛い後輩が頑張っている姿を見ると、また立ちたくなります。

●後輩に伝えたいことは？

自分の時は、つらくて途中（海ノ口）でやめてしまいました。行こうと思えば行けたのですが、あきらめてしまつて。今してみれば、悔しい。後輩にはあきらめずに行ってもらいたい。

●最後に一言お願いします

早く小諸まで延長して欲しい。手伝いももっと必要になるという事です。

感動したことがありました。たまたま、交代で松原湖の救護所にいた時のことです。生徒が二人休んでいました。一人が、ちょっと疲れ気味のもう一人の友達に「おい、大丈夫か、大丈夫か」と言つて、足をさすってあげていました。なかなかあんな光景は見られない。若いのに、人を思いやる心があるんだなど、今回一番感じたことでした。

小海救護

検印所・ゴール

受付・小宮山先生

●女子は今年から延長されました

女子はゴールが、昨年までの野辺山から今年は小海に延長となり「未知の世界」です。みんな無事で元気に到着してくれると思います。

●検印も、昔とは変わったのですね

以前は紙のカードにスタンプを押していましたが、雨が降るとカードが破れてしまったりしました。去年から、カードのバーコードでチェックしています。ホルダーになったので破れる心配もなくなり、便利になりました。

●ゴールした生徒に一言かけるとしたら何て言いますか？

よく頑張った！って抱きしめてあげたいです。



ゴール風景

こぼればなし

強行遠足の
お守りの慣わしは
いつ始まったのか？



東京同窓会の幹事会にて、昭和五十年卒と平成三年卒の間で、強行遠足の話になり、五十年卒在学時はお守りの慣わしがあったことがわかった。一紅会の昭和五十一年卒～五十六年卒の方、美咲52 TOKYO事務局の方のご協力のもと、お守りに関してのアンケートにご回答いただいた。

質問は、①お守りを男子に渡す慣わしはあったか。②誰にあげたか(本命、義理、クラスの男子、同じ部活の男子など)③お守りの中身は？④お返しはもらったか。お返しは何を？

回答【五十年卒】お守りではなく、手作りのマスコットを渡し、お返しにリングを渡すということはあったようだが、学年全体ではなく、一部の人がだけであった。【五十一年卒】お守りの慣わしはあったが、個人的に渡す人だけであった。三年次、クラスの女子全員で、男子全員に義理お守りを渡したというクラスも出始めた。【五十二年卒】現在のお守りの基礎が固まる。ほぼ全員が好きなら、同じクラスの男子、部活の男子に配るようになる。お守り袋に小諸到達と千回書いた紙または、応援メッセージを書いた手紙、飴を入れた。一年次からもらった男子もいる

～ 強行遠足 コースと距離の変遷 ～

【第一回 東京方面コース】

第一回は十二時間制で東京方面に、歩けるところまでというルールで、実施された。最高記録は上野原（六十四キロ）。

【第二・三回 松本方面コース】

笹子・小仏峠の道が険しく、交通量も多いため、第二、三回は松本方面コースとなる。二四時間、松本駅終点制。初回からは遠足運動、強遠足としていたが、第三回目より強行遠足と呼ばれるようになる。

【第四・五回 木曽福島・松本方面コース】

松本を過ぎて、生徒にまだ体力の余力ありということで、第四回は従来の松本コースから別れ、木曽福島方面に向かうコースも設け、どちらも行けるところまで歩いた。

【第六・三六回 信濃大町方面コース】

木曽路は国鉄の駅の間隔が長く、乗車指導が困難であったため、第六回より松本以北を大糸線沿線とする信濃大町方面コースと定めた。救護所の場所には知らせるが、途中不正を防ぐため、検印所の場所は秘密にされていた時もあった。

【第三七～七六回 小諸方面コース】

ゴールを設け、終点制とした。第三七回は男子松原湖（六六キロ）、女子箕輪新町・松原湖（三八キロ）。各回徐々に距離を伸ばし、第四一回には男子の終点が小諸まで百キロとなり、第

五〇回には、生徒の希望により女子のコースが高根―小海（四二、五キロ）に延長された。

【第七七～八一回 野辺山方面コース】

平成十四年の痛ましい事故の翌年より、大幅にコースを短縮して実施。

【第八二～八五回 小海・野辺山方面コース】

男子が小海まで延長（七六、三キロ）、女子は変更せず須玉―野辺山（三〇、三キロ）。

【第八六回 小海方面コース】

女子のコースが、高根―小海に復活。

《特記事項》

第一七回初の打ち切り（前進停止時間）を実施。昭和二十年、終戦につき中止。第二五回女子初参加。第三三回最長走破記録樹立（築場一六七、一キロ）。第五三回学年別に時差をつけてのスタート方式を採用。昭和三四年伊勢湾台風のため中止。平成二年、台風18号のため三度目の中止となるが、三年の末木君は強行遠足の定められた条件を守り、一人で走った。彼は一年、二年次ともに学内一位で、三年次には非公式ではあるが

自己記録を更新した。第七〇回名物のしじみ汁を三〇年以上作り続けた丸山良雄氏がご逝去。平成十八年、臼田のおばあちゃんこと、依田トミ子さんご逝去。

保坂 香子（平成三年卒）

第1回（大正13年）東京方面コース（最高到達 上野原 64km）

甲府―石和一勝沼―初鹿野―笹子―初狩―大月―猿橋―鳥沢―四方津―上野原―東京

第2・3回（大正14・15年）松本方面コース（距離不明 松本到着者 14名）

甲府―韮崎―富士見―茅野―上諏訪―岡谷―辰野―塩尻―松本→

第4・5回（昭和2・3年）木曽福島・松本方面コース（木曽福島まで約115km 到着3名）

甲府―韮崎―富士見―茅野―上諏訪―岡谷―辰野―塩尻―松本→
―賛川―木曽福島→

第6～36回（昭和4～36年）信濃大町方面コース（男子最高到達 築場 167.1km 女子終点制 28.6～45.2km）

甲府―韮崎―富士見―茅野―上諏訪―岡谷―辰野―塩尻―松本―豊科―築場→

第37～76回（昭和37～平成14年）小諸方面コース（男子66～107.1km 女子26～47.4km）

甲府―韮崎―箕輪新町―長沢―三軒家―清里―野辺山―海の口―松原湖―小海―中込―小諸

第77～81回（平成15～19年）野辺山方面コース（男子53.7km 女子30.3～31km）

甲府―韮崎―須玉―高根―清里―野辺山

第82～86回（平成20～24年）小海方面コース（男子76.3km 女子は86回より小海 30.3～43km）

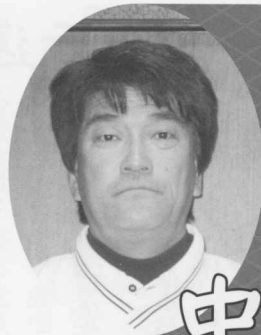
甲府―韮崎―須玉―高根―清里―野辺山―海の口―松原湖―小海

ので、四十九年秋には行われ、三年生（五十年卒）までは、広まっていなかったとも考えられる。本命へのお返しは、姫リンゴ。【五十二年卒】お守りの中には、メッセージを書いた紙。本命には、白田のリンゴ、他には小諸で買ったリンゴを。【五十四年卒・五十五年卒】本命、部活の男子などに。鮎、メッセージを書いた紙。お返しは白田のリンゴ。【五十六年卒】本命、クラス、部活の男子などに。絆創膏、鮎や好きな菓子、手紙、緊急時の十円玉。お返しは小諸のリンゴ。【平成三年卒】中身は、チョコク、鮎、絆創膏、トレーシングペーパー。チョコクで男子が、後から来る女子に道路にメッセージを書き、女子の最後尾が通ったあと先生が消していた。トレーシングペーパーには、男子走行距離が百二kmだったので、百二回、本命には小諸必着、義理には小諸到着と書いた。お返しは、本命には白田のリンゴ。もらったリンゴでアップルパイを作る噂もあったが実際に作った人はいなかったようだ。【二十五年卒】一年生の時に生徒会から強行遠足のお守りに関するプリントが配られた。ジョンソン&ジョンソンの絆創膏、サクマのいちごみるく、本命には小海必着、友達には小海到着と七十六回書いたトレーシングペーパー。途絶えることなく、これからも続いてほしい。

保坂 香子（平成三年卒）

強行遠足実行責任者

中澤先生に聞く



●今回の強行遠足の総括は？

特に大きい問題もなく無事に成功し、予想以上の成果でした。体調を崩した生徒もいません。一日置いて学校に登校し、平常にやっています。

●雨が降って大変だったのでは？

生徒は覚悟していたので、そんなに気にしなかったようです。強行遠足に取り組む姿勢ができていたのではないでしょう。それが、到達者の数にも現れていると思います。

●責任者として今回特に苦労された事がありますか？

準備期間が一年と長いのが大変ですね。今年は特に、まきば公園付近で熊の出没情報がありました。吉田高校が富士登山の際、熊避けの鈴をつけたという話を聞いたので、その鈴を借り、生徒につけてもらいました。

また、二千台以上が参加する自転車レースが同じ日にあり、清里で女子の先頭と重なって大混雑になりましたが、警察が

自転車を止めて本校生徒を優先してくれ助かりました。

そして今年も、同窓会の皆様には積極的にご協力いただき感謝いたしております。通常は、甲府の同窓会当番幹事学年とその前後の三学年の協力で、三箇所の給水所を担当してもらっていますが、今年は終了した学年の方も協力してくれて、四箇所の給水所を同窓会にお願いできました。

●生徒を見て、印象深かった点は？

特に松原湖の給水所の先に十年前の事故現場があるのですが、生徒が手を合わせて行く姿に何とも言えない気持ちになりました。そしてそこを過ぎると小海ま

で約三キロとなりますが、泣きながら通り過ぎていく生徒が非常に印象深かった。終点の小海でも同じで、

「これが一高の強行遠足なん



だな」と改めて感じました。

●最近、生徒も強行遠足の準備を手伝っているようですね。

そうです。生徒にも準備を手伝ってもらうことで「これだけ多くの人に手伝って頂いて成り立っているんだ」ということを知ってもらい、感謝の気持ちや意識を持ってもらえるようにしています。

●同窓会、OBへの期待・要望は？

今は、事故があったこともありですが、そこまでやるのかと思う位、安全を重視して実施しています。

そのため特に医師、看護師の方が必要なのですが、かなり不足しています。今まで、東京同窓会の医師の方には、個人的な人間関係でお願いをしており、昨年は四人の方に協力を頂きました。今年も申し出は頂いたのですが、スケジュール等の関係で協力頂けなかったのが残念です。

東京同窓会の組織として、ご協力をお願いできればと思います。

また小諸復活となると、今まで以上に同窓会の皆様のご協力を得られれば、大変助かります。

●先生の考える強行遠足の意義とは？

甲府一高そのものだと思います。

創設期より「妥協と怠慢を排して精根限り歩く」という「原点」を常に意識しながら、日常では得られぬ貴重な体験を通じて己が成長できる「無心」の世界ではないでしょうか。

第八十六回強行遠足の記録

	男子	女子
生徒数(人)	397	433
参加予定者	383	417
欠席者	0	2
出発者	383	415
小海到着者	276	341
完走率	72%	82%

男子は、雨の中でも到着率が一〇%位上がっている。

女子は、昨年は高根・野辺山間の到着率が一〇〇%。今年は、小海まで約一〇キロ延長したがあまり延長の影響はなし。

今回の強行遠足協力者のうち、同窓会の人数 二〇五人。

また北見北斗高校との強行遠足交流を始めて二十年となる今回は、一高から二年生四名を北見へ派遣した。北斗高では校長先生自ら空港まで足を運ばれ歓迎して頂き、生徒も感激。次回(平成二十五年)は、北斗高の生徒を招待する年になるとの事である。



OB強行遠足に参加して

物江芳明 (昭和五十年卒)
田中與志子 (昭和五十年卒)

このOB強行遠足は、距離が短縮された強行遠足の小諸までの再開を目指し、一高と長坂間二十八キロをOBが歩いているもので、今年で八回目を迎えました。

発起人の内藤さんのお話を伺いました。

「事故があつて、強行遠足の距離が短くなったので、復活を祈念してOBで何かできることはないかと始めました。最初は台ヶ原まで行つたのですが、バス代もかかることから、オオムラサキセンターの所長が同級生なのでゴールとしました。ここならば徒歩で駅に行け、リーズナブルにできるようにしました。甲府中学の強行遠足が、十一月三日に行われていたことから、この日を中心に開催しています。」

今年も、十一月三日(土) 朝七時に一高を出発しました。好天に恵まれ、気温も歩くのに心地よい好条件の中、多くのOBが昔の強行遠足のことを思い出しながら歩きました。

第一ポイントは、双葉給水所です。

ここで、すでに結構な距離を歩いたよう前で前途にやや不安を感じながら到着しました。

第二ポイントは、葦崎給水所、葦崎鶴城会の皆様がセッティングされています。昭和五十四年卒三上さんは第一回から給水所の設営、大福の買い出しのお手伝いをして下さっています。高校時代は山岳部で今でも山を案内する仕事をしているそうです。

次の給水所は、祖母石給水所で昭和三十九年卒秋山さんが第一回からガソリンスタンドの一角を開放し、イスやテーブルを用意し、コーヒーや麦茶までサービスして下さいます。ゆっくりと一息つけるありがたい給水所です。給水所を開いたきっかけは、発起人の内藤さんに頼まれたからだそうです。「店を営業しているから高校のお手伝いではないので、せめてOB強行遠足のお手伝いをしています。」と話して下さいました。

紅葉の中、昔の仲間たちと語らいながら、各々のペースでみなさん楽しくそくに歩いています。参加者の感想やこれからの強行遠足について伺いました。

OB強行遠足に参加されている多くの方は、在学中小諸(や時々ゴール)まで行つた、それとかなりの好成績で、ということがわかりました。

思い出も実に楽しいものでした。寝ながら歩いて川に落ちかかったり、昭和三十九年卒は一年の時はまだ松本方面への二十四時間で、トラックが走る幹線道路で寝てしまつたり、今思えばかなり危険なこともあつたようです。翌年からコースが変更になり、出発時間が午後六時と遅くなったため、バス停を移動したり、よそのお宅の玄関を電報ですとたたいたり、いたずらをした人もいたなどというエピソードを語ってくれた先輩もいました。

強行遠足についての「想い」は皆さんそれぞれ強く、

「小諸まで行けた思い出は、辛い時、苦しい時、色々な事に行き詰まつた時、これくらいならまだ小海までぐらいいかと思ひ、頑張れる力になった。」

「夜中に歩いていると寒くて辛いけど、夜明けが来ると元気になれる。どんなに苦しくても、必ず夜明けが来ると信じる事ができた。人生の指針となり、その後の生きる糧となった。」

「在学中は何でこんな思いまでして、という気がしたが、今思えば、強行遠足は一高生でなければ味わえないことであつた。」

このような感想を聞くことができました。

十四、五歳の頃一緒に夜中の道を歩き、そののちそれぞれの道は幾重にも分かれていたのにこうして還暦を過ぎて再び一緒に道を歩いている先輩たちの姿を見て、これもまた強行遠足の与えてくれたかけがえない賜物に思えました。



若い世代の力で

更に前進を！



一紅会会長 谷口百合子

(昭和三十六年卒)

うして培われた絆が取りも直さず東京同窓会活性化の礎になっているものと思っています。

日頃は、一紅会の活動に深いご理解とご協力を賜りまして心より御礼申し上げます。

昨年七月に第四代会長に就任しましてから早一年が過ぎようとしています。その間、多くの方々から温かいご支援をお寄せ頂きまして大変嬉しく有り難く存じております。

東京同窓会の女性のネットワークとして誕生しました「一紅会」も、今年で十六年目を迎えました。運営の核となつています幹事会は、今は卒業年次毎に選任された幹事七十余名で成り立っています。年々若い方が参加して下さるようになり、同窓の縦横の繋がりも深まり、生き生きと和やかな雰囲気にも包まれている光景は大変喜ばしいことです。前任者のご努力により、こ

会から派生した歴史研究同好会も別途紹介させて頂きました。

時代と共に変化していくこれからの同窓会活動も必ずしも平坦な道のりではないかも知れませんが、一紅会は役員が心を一つに和やかな運営を目指していきたいと存じます。そして甲府一高の同窓生という巡り合わせを大切に、微力ながら力を尽くしていく所存でございます。皆様の一層のご理解とご鞭撻をお寄せ下さいますようお願い申し上げます。

一紅会歴史研究

同好会の窓から

井上 若子

(昭和三十年卒)

第八回の一紅会講演会に、三十八年卒の渡辺房男講師（東京同窓会副会長）をお迎えして「幕末維新への旅」私の歴史小説Ⅱを講演して頂きました。その直後、皆様から幕末維新の歴史をもっと継続的に勉強したいという要望が寄せられて発足しましたのが「歴史研究同好会」です。以来渡辺先生をリーダーに関心をお持ちの方々四十人程参加して勉強会を重ねて十四回になります。

最初は春秋二回室内やフィールドでの勉強会でしたが、平成二十一年秋「牧ノ原に生きる」徳川家臣団の維新」を学びましたので、翌年春の八回目には、その歴史の舞台となった静岡県牧ノ原・島田界限へ初めての日帰りバスツアーを催行し、楽しい歴史散策の一日を共有しました。これがパターン化して、去年は「儲けすぎた男」安田善次郎」の故郷富山へ宿泊ツアーを楽しみました。そして今年五月には「山梨中央銀行と初代蔵相松方正義」の学習習得の甲州路歴史散策バスツアーで、懐かしの母校へも訪問しました。

活動の模様は東京同窓会HPにも掲載されていますのでご覧下さい。また是非ご参加下さいますようお願い致します。



講師の渡辺房男氏

第十六回一紅会主催「春の講演会」

子ども達に活かされて

く共に歩む小児科医の夢く

講師 小口弘毅氏

(昭和四十五年卒)



小口さんは強行遠足のライト付き帽子で登場し、会場は一瞬にして和やかな雰囲気となった。専門的なお話もスライドやビデオを使い分かりやすく、間には心癒される様々な絵画も差し込まれていた。

日本でもほんの百年前まで高かった乳児死亡率は、医学の進歩と衛生面、栄養状態の改善により格段に低下し、子ども達の命を救えるようになった。

しかし、こうして助かった子ども達の中には、少数であっても結果として重い障害が残り、何年もの入院生活を余儀なくされる超重症児もいるのである。また在宅医療の場合も家族の負担は増大するため、退院後の医療福祉対策が重要になってくる。

講演の合間には佐々木まちこさん(四十五年卒)がNICUで治療を受けた子どもや母親からの手紙を朗読し会場は感動の渦に包まれた。

医療がどんなに進んでも全ての子ども

を救うことはできず、最後は家族の腕の中で看取る事が大切だという話が特に印象に残った。

最後はイギリスのヘレンダグラスハウスが紹介された。ここは、世界初の子どものためのホスピス。精神的ケアがある緩和医療施設で、子ども達が両親や兄弟と過ごす事が出来る、まさに理想の環境だ。日本にもヘレンダグラスハウスを一つのモデルとして「白州プロジェクト」が始まっている。

そのプロジェクトについて田伏純子さん(四十四年卒)が話してくれた。彼女のお嬢さんは高校二年の時に突然発病し重症心身障害者になった。小口先生や田伏さんも参加している難病のこども支援全国ネットワーク(認定NPO法人)が白州に医療的ケアが必要な子どものためのふるさと作り「みんなのふるさと夢プロジェクト」を始めた。病気や障害のある子ども達と家族が好きな時に訪れ、自然に触れ合いながら、感性を育む事が出来る常設のキャンプ場だ。

同窓生がこの夢プロジェクトに偶然集ったこと、その場所がふるさと山梨の白州だったことに不思議な縁を感じた。

講演会は参加された皆さんに大変好評で、意義ある会となった。

文・田中與志子

(昭和五十年卒)

一紅会 講演会を聞いて

松田 朋子 (昭和五十年卒)

「赤ちゃん誕生おめでとう！」明るく希望に満ち溢れたお祝いの言葉。けれど、もし自分の身近にいる女性が、重度の障害をもった赤ちゃんを出産したと知った時、果たして私は、母となった女性にこの言葉をかけてあげることが出来るだろうか。小口先生がおっしゃった、「どんな障害や先天異常を持った子どもでも祝福することが大切なのです。私は必ず母親に『おめでとう』の言葉をかけることにしています。」という言葉は、重く深く心に沁みました。

近年、新生児医療の目覚ましい進歩によって、助かる子ども達が飛躍的に増加した一方、命はとりとめたものの、治療困難な超重度の障害をもつ子どもが取り残されている、という事実に驚きました。また、新生児集中治療室で危機的状況と戦う赤ちゃん達の写真をたくさん見せていただきましたが、その子達がやつと病院を出てからあとの長い年月、医療を含む社会全般の支援体制が日本はあまりにも貧困であることも、大きな驚きでした。

救われた尊い命が健やかに成長していきけるよう、先生が力説しておられたように、家族、とりわけ母親が孤立せずに安心して子育てに取り組めるような、地域・社会の支援体制の整備が急務だと思います。また、そのために、ささやかでも自分にできることがあれば、お手伝いしていきたいと思いました。貴重なお話を伺うことができて感謝しております。

甲府一高 この一年



平成 24 年 4 月～25 年 3 月
資料提供：甲府一高

4月

入学式

8 日入学式が行われました。今年度は、普通科 240 名、英語科 37 名、計 277 名の新入生を迎え、本校体育館で行われました。



応援練習

11 日、12 日、一年生を対象に体育館で応援団の指導のもと応援練習が行われました。



第 64 回山梨県高等学校総合体育大会

9 日、小瀬スポーツ公園陸上競技場で総合開会式が行われました。競技は 11 日までおこなわれ、本校からは 17 部が出場しました。

一高の総合順位は男子 18 位 (11 点)、女子 11 位 (11 点)。山岳部女子は全国大会へ、陸上、山岳部男子、空手女子、アーチェリー男女、の 4 競技が関東大会への切符をつかみました。



5月



一高キティちゃん

同窓会総会で販売された一高キティちゃんが新聞でも紹介され、本校購買でも発売され人気を集めました。

6月

アーチェリー部関東大会個人準優勝

本県開催の関東大会で、アーチェリー部長田有紗さんが準優勝という快挙を成し遂げました。



一高祭

22日から二日間にわたり一高祭がはじまりました。文化ホールで、開祭式のあとクラス発表・文化局発表がありました。二日目は、一般公開がありました。たくさんの方が来校されて、クラス展示や似顔絵、部展示、クラス新聞など見ていただきました。

全国高校野球山梨大会

第94回全国高等学校野球選手権山梨大会で、本校野球部は14日に二回戦から登場し日大明誠高校に4対16で、敗退しました。



7月

キズナプロジェクト

— ケネディ高校との交流 —

東日本大震災後、日本政府が作った海外青少年の招聘事業キズナプロジェクトでアメリカアイオワ州のケネディ高校の生徒28名が16日から18日まで本校を訪問し、生徒の家にホームステイしながら交流を深めました。



学校説明会

普通科・英語科の説明会が17日に山梨県民文化ホールで行われました。生徒主体の運営で好評をおさめました。

8月

日新基金プロジェクト

創立130周年を記念して創立された生徒の自主的活動を支援する日新基金で、今年は「一高サイエンスレクチャー—DNA鑑定で遺伝子を観察してみよう」というプロジェクトが採用され、7日と9日に企業の研究室と大学を訪問し遺伝子の観察実験を行いました。この成果をもって9月30日に中学生11人が本校生徒の指導で遺伝子の実験観察を行いました。

オープンスクール

25日に本校において「オープンスクール」が行われました。午前と午後の2回に分けて、体験授業・部活動披露・施設見学等が行われ、中学生・保護者ら約950人が参加しました。



甲府第一高等学校美術館

日中友好40周年記念交流美術展—HORIZON が本校で行われ、生徒や一般の方、中国の芸術家の方の力作が展示され、保護者、同窓生をはじめ多くの来校者がありました。

9月

10月

第86回強行遠足

6日～7日に、本校最大の行事である強行遠足が行われました。今年は女子の距離が高根から小海までの43kmに延長されました。男子は学校から長野県小海までの73km。男女とも己の力の限界に挑みました。多くの同窓生の方にご協力をいただきました。また、東京同窓会の方々の取材やご協力もありました。



新人戦

二年生が中心となった新チームの公式戦では、アーチェリー部が全国大会、陸上・テニス男女は関東大会に出場が決まりました。他の多くの部も健闘しました。

山梨県高等学校芸術文化祭

7日に開会式が行われた山梨県高等学校芸術文化祭では14の文化部から150人が参加し、芸術文化祭賞（美術部・囲碁将棋部）最優秀賞（新聞部）優秀賞（美術部・箏曲部・写真部・応援団吹奏楽部）等多くの賞を受け、文化活動の成果を披露しました。

11月

朝日町の活性化—えびす講祭り参加

本年は一高の生徒と富士アイスのコラボ企画、一高スイーツが販売され、好評を博しました。

12月

研修旅行

11日～14日に、二年生が沖縄に研修旅行に行きました。沖縄の美しい自然に触れ、平和学習で講話を聞いたり、戦跡をめぐったりしました。

石橋湛山賞受賞

山梨平和ミュージアム主催の第一回石橋湛山平和賞に本校の生徒が優秀賞と佳作を受賞しました。

同窓会入会式

28日に三年生280名が同窓会に入会しました。

2月

3月

卒業式

1日、280名の卒業生が母校を巣立っていきました。



短期海外研修

短期海外研修に生徒27名と教員2名がオーストラリアの姉妹校ヘンリー高校に9日から18日まで、研修に行ってきました。



まわる回るよ時代は回る♪

当番幹事在籍時の出来事

昭和四十七年

出来事

- 二月 元日本兵 横井庄一さん、グアム島から帰国
- 札幌五輪開催 日の丸飛行隊スキージャンプでメダル独占
- 三月 連合赤軍・浅間山荘事件発生
- 四月 **当番幹事学年 甲府一高入学**
ノーベル賞作家 川端康成 自殺
- 五月 沖縄返還
- 七月 田中角栄内閣成立
- 八月 ミュンヘン五輪 体操・笠原「月面宙返り」で金メダル
- 九月 日中国交回復
- 十一月 中国政府寄贈のパンダ二頭、上野動物園で公開

ベストセラー

- 恍惚の人 (有吉佐和子)
- 日本列島改造論 (田中角栄)
- 坂の上の雲 (司馬遼太郎)

ヒット曲

- 女のみち (宮史郎とぴんからトリオ)
- 瀬戸の花嫁 (小柳ルミ子)
- 喝采 (ちあきなおみ)

1972

昭和四十八年

出来事

- 二月 為替が変動相場制に移行
- 四月 春闘史上初の交通ゼネスト
- 祝日法改正 「振替休日」が誕生
- 九月 国鉄中央線に初めて「シルバースート」設置
- 十月 江崎玲於奈、ノーベル物理学賞受賞
- 第四次中東戦争勃発
- 第一次オイルショック発生
- トイレットペーパー・パニック
- 以後各地で買占め騒動発生
- この頃から「狂乱物価」に
- 十二月 愛知県豊川信金で取り付け騒ぎが発生

ベストセラー

- 日本沈没 (小松左京)
- 華麗なる一族 (山崎豊子)
- ぐうたら人間学 (遠藤周作)

ヒット曲

- 学生街の喫茶店 (ガロ)
- 赤い風船 (浅田美代子)
- 神田川 (南こうせつとかぐや姫)

1973

昭和四十九年〜五十年

出来事

- 一月 電力使用制限令、国鉄は昼間の暖房停止、百貨店の照明間引きなど
- 三月 元日本兵小野田寛郎さん、フィリピンから帰国
- 五月 東京・江東区にセブン・イレブン一号店開店
- 八月 東京・丸の内で三菱重工ビル爆破事件発生 (八人死亡、三七六人負傷)
- 九月 台風十六号で六十四年ぶり多摩川決壊
- 十月 巨人軍、長島茂雄引退
- 田中金脈事件が表面化
- 十二月 田中首相退陣・三木武夫内閣成立
- 十二月 佐藤栄作前首相、ノーベル平和賞受賞
- 三月 ハローキティ 初めて発売
- 山陽新幹線、博多まで開通
- 当番幹事学年 甲府一高卒業**

ベストセラー

- かもめのジョナサン (リチャード・バック)
- ノストラダムスの大予言 (五島勉)
- やせる健康法 (中村紘一)

ヒット曲

- うそ (中条きよし)
- 恋のダイヤル六七〇〇 (フィンガーファイブ)
- くちなしの花 (渡哲也)

1974~1975

私の近況 恩師の方々から

昭和五十年卒当番幹事

恩師の近況

老いの入舞の境地で

小澤俊夫先生

私の在所は、中央道甲府南インターの北二キロメートル、近々のリニア中央新幹線の想定ルート南五百メートルの位置である。ここから甲府中学、甲府一高と二十年間に互って関わる事ができた。在学生六年、教職員として十四年、実に母校は有難い存在であった。そして、当番幹事の五十年卒業生と共に私も母校を去り、学校現場、教育委員会勤務を経て、平成三年に定年退職した。正に在郷者となつて、果樹栽培を生業としてきた。健康にも恵まれ、日々是好日であるが、そろそろ人生の仕舞時がやってくる。

能役者の世阿弥は「老いの入舞い」という言葉を「花鏡」に残している。その実体はなんだろうと考えたところ、それは老境の舞手が自然に発する円熟した技能そのものではないかと思えた。そこで、まだまだと老後の初心を貫きたいと思うこの頃である。

「発見と挑戦のドラマ」

小林正義先生

空間における2点間の距離についても、1次元、2次元、...n次元、無限次元空間へと拡張されています。

私は退職して、早十三年が経過し、今は、山を散歩したり、フルートを練習したり、数学を学んでいる毎日であります。また最近、江戸時代の数学について関心を持ち、先日は、岩手県一関博物館主催の「和算」に挑戦しました。現存する算額からの出題ですが、数学の醍醐味、面白味があり、自然界の不思議さと、調和のとれた美しさに触れ、感動しています。

最近では、iPS細胞に関する研究や、3Dプリンターの応用など「発見と挑戦のドラマ」が展開されています。

空間が短く、時間が長くなる今日、同窓会の皆様のご発展とご活躍を、願ってやみません。お元気で！

近況報告

一木壽一先生

ようやく春らしくなりましたこの頃です。お元気にお過ごしのご様子なによりです。さて、このたびは、東京同窓会のおしごとご苦労さまでございませう。

ところが、私一木は体調悪く、会に参

加することができません。申し訳ないことですが、欠席いたします。

どうぞ、東京の同窓会のため、おはたらきくださいますよう、心から念じております。

では、会員の皆様のご盛會を祈っております。

どうぞ、お元気で。

思い出すままに

伊藤嘉雄先生

今年の東京同窓会の当番幹事を務める皆さんとの出会いは四十一年前のことで、私も三十歳代から四十歳にかけてのところで長い教員生活の中で最も充実した出会いの日々であったと覚えている。入学して間もなくの白樺湖への研修旅行に出かけたころの皆さんは、純朴でおとなしい生徒だった。そして「人生における掛け替えのない経験」である強行遠足。生徒会が一丸となる「一高祭」。さらには、二年次の合歓の里・吉野・京都への研修旅行などを体験して、昭和五十年の春、皆さんはたくましく成長して旅立っていった。振り返るとずいぶん昔のことだが鮮やかに蘇ってくる。

「日新鐘」の銘でもある「苟日に新たに 日に新たに 又日に新たなり」をはじめ、「Boys be Ambit

ious!」、「Be Gentle man!」、「天地之化育に賛べし」など、甲府一高には校是に相当する言葉が継承されているが、それらに籠められた志や精神は、甲府一高を貫く校風や活力となって現在に生き続け、在校生を薫陶・感化している。

私の甲府一高との最初の出会いは昭和二十五年四月の高校生としての入学であった。それ以後二回、教諭として十年間、校長として二年間奉職する幸運にも恵まれ、合わせて十五年間、母校の恩恵を直接に受けることができた。幸せなことであった。

一日を両日として

新海博恭先生

甲府一高に赴任したのは昭和四十一年三月でした。最初に担任したのは三年六組。遊ぶときは遊び、やるときは懸命にやる姿にカルチャーショックを受けたことは今でも思い出します。七年間お世話になり、心に大きな財産をもらいました。県教委、韮崎高校を経て退職、今思うと本当に一瞬のようです。八十歳を超えひざが少し痛い、家庭菜園や多少社会に役立つことをさせてもらいながら元気で過ごしています。皆様方のご健勝を心から祈っています。

平成三年卒サブ幹事

恩師の近況

高瀬孝人先生

定年退職してから、県国際交流協会に勤務し、本県の国際交流の実情について幅広く見聞する機会を得ました。二年前に仲間たちと就職支援の一環としてNPO法人「資格取得支援機構GOODJOB」を立ち上げ、行政書士・宅建主任者・臨床心理士・パソコン・TOEIC・翻訳者などのキャリア・アップ講座を開設しています。

佐々木宏夫先生

現在、富士河口湖高校の校長をしております。富士山の世界文化遺産登録が期待される中、故郷と文化を愛する有為な人間になって欲しいと生徒たちに望みながら教育に従事しています。ワーズワースの言葉『Plain living and high thinking』を生活信条として暮らしています。皆様の御健勝と益々の御発展を祈念申し上げます。

橘田多喜夫先生

四月から市川高校校長として勤務し

ています。先日、同窓会で皆さんと久しぶりに会い、当時は懐かしく思い出しました。私は、教員生活が二年を切りました。健康のため、週末はウォーキングに頑張っています。

浅川 保先生

二〇〇六年三月に退職、現在、山梨平和ミュージアム―石橋湛山記念館―の理事長として、忙しい毎日です。ミュージアムでは甲府中学出身で、言論人・政治家として評価の高い石橋湛山の生涯と思想、甲府空襲・甲府連隊等の展示の他、月講演会等もしており、県外からも多数、訪れています。まだの方、見学においで下さい。

篠原昭次先生

いつまでも若いつもりでおりましたが、いつの間にか古稀を過ぎてしまいました。現職のころに比べ時間余裕は十分あるはずなのに地域の諸役を仰せつかり忙しく暮らしています。

今のところ健康上の不具合もなく、気力、体力もそれなりにありますので健康保持のため農作業に精出していきます。またその合間にゴルフ、小旅行、無尽会と称する飲み会等にせっせと参加し楽しく過ごしております。

甲府中学・甲府一高東京同窓会のHPへアクセスして下さい!

- ◆ 甲府中学・甲府一高東京同窓会の URL <http://www.kf1-tk.jp/>
- ◆ 同窓会誌「日新鐘」の URL http://www.kf1-tk.jp/nissinsyo_all.html
(バックナンバーを掲載。ダウンロードもできます)
- ◆ 一紅会の URL <http://1kokai.kf1-tk.jp/>
(過去の「春の講演会」も掲載しています)



100 字 私の近況

同窓生編

ホームページ入力、FAXなどで、
6月中旬までに投稿いただいたものを掲載しています。

奈良田 光男 昭和 26 年卒

生涯現役を貫く所存

傘寿を超え“知足”の心境ですが、10 年前から、亡き後輩が福島県いわき市に開設した、こうじま慈愛病院
名誉院長・理事として、管理経営、医師として地域医療の充実に努めています。

樋泉 靖志 昭和 37 年卒

僕は今年で古稀だ、父は甲中の強行遠足で一番「金の草鞋」をもらい、海軍二〇一航空隊「ゼロ戦最先端部隊」
に従軍、31 歳少佐で戦死。祖父は父親が生まれた一年後に病死、二人の分まで僕はもう少し生きようかな？

中込 義之 昭和 38 年卒

東京の現役生活を卒業して、南アルプス市に戻り、定年後の農業をしています。趣味はワンダーフォーゲル（登
山など）、サックス、水彩画、アマチュア無線（メール: jalmuh@jarl.com）など。お気軽にお声掛けください。

山本 秀彦 昭和 41 年卒

今年は私達が甲府一高に入学してから丁度半世紀になります。そこで 8 月 31 日に、甲府の常磐ホテルで昭和
41 年卒の同期会を開催することとしました。卒業以来初めて会う人もおり、楽しみにしています。

玄間 稔 昭和 47 年卒

今年は 60 歳還暦の節目の年に孫が生まれ、とうとうおじいちゃんになりました。還暦を迎えこれからの余生、
ボランティアをはじめ、何が恩返しできるかを考え、行動していきたいと思っています。5 月 24 日から南三
陸町へ再び行ってきます。

岩澤 忠彦 昭和 47 年卒

世田谷にある関連団体に転籍して 2 年、ことばとコミュニケーションの研修に携わっています。書きことばで
はなく、話しことばで「的確にわかりやすく話す」トレーニングに取り組む毎日です。

渡辺 正文 昭和 47 年卒

今年は人生の節目である還暦を迎えますが、多くの同級生と異なり 60 歳でハッピーリタイアメントを迎える
ことが出来そうにありません。これも長〜い独身時代を謳歌し過ぎたツケかな？

米山 敬文 昭和 47 年卒

4 月に 20 数年ぶりに富士山に行きました。本栖湖近辺にある芝桜を見に行きましたが、車で走る途中の景観、
かなり変わっていて驚きました。5 月にも初めての西沢溪谷に行きましたが、想像以上に綺麗でした。あらた
めて山梨の良さに触れる事ができました。

八田 政仁 昭和 48 年卒

一昨年幹事が終わってから、みんなで楽しんでいます。そろそろ還暦に向けたイベントを考えないと...

青柳 靖元 昭和 48 年卒

いよいよ還暦が近づく年代…若き日に同じ釜の飯を食べ将来を語り合った友との再会が、年々楽しみです。甲府同窓会、東京同窓会等での出会いに胸ときめかせ、100 歳めざして元気な毎日を送っています。

荒居 正弘 昭和 48 年卒

11 年度の担当幹事が 48 卒と知りお手伝いする予定でしたが、10 年正月に息子から彼女の妊娠を告げられ、7 月に結婚し同居、11 月に出産。お手伝い出来なくてごめんなさい。激動の 2 年間が過ぎ、毎日孫の顔を見ながら晩酌しています。今年の 11 月には七五三です。

広瀬 高行 昭和 49 年卒

東京同窓会開催おめでとうございます。昨年の日新鐘を担当しました。お疲れ様です。苦勞の分だけ感慨も「ひとしお」ですよ。皆に感謝しながら最後のひと踏ん張り。がんばれ！ 楽しみにしています。

塩崎（旧姓永井）幸子 昭和 50 年卒

甲府・東京と四国を往来しつつ、神戸にすんで 29 年。絵本と音楽と美術とワイン、様々なアートと活字に囲まれる至福の時を求め、日本 & 世界中のアートシーンを巡りたい、と妄想中。でも、終の住処は甲府がいいな。

今西（旧姓雨宮）聡子 昭和 50 年卒

兵庫県西宮市。私は、割と住み心地の良いこの町で呑気に暮しています。近代史(軍事社会史)研究をしていて、学会みたいな所に出没したり論文らしきものを書いたりしています。おっと忘れてました。家事もしてます。

海沼 弘忠 昭和 51 年卒

今年から強行遠足が小諸までとの新聞記事を読みました。受け継がれてきた伝統ある行事、当時のスタンプカードは大切に持っております。4 年前に亡くなった父も強行遠足の話と「希望の光」はとても好きでした。

勝村 良一 昭和 53 年卒

山梨の良さを首都圏の女性に伝えるキャンペーンを実施しています。私自身も「やまなし大使」として、甲州ワインなど県産品や観光資源を PR しています。

依田 訓彦 昭和 56 年卒

今年の「第 133 回甲府中学・甲府一高同窓会 総会・懇親会」は 5 月 18 日、甲府富士屋ホテルにて 1000 名を超える同窓生をお迎えし、盛会裏に終了できました。昭和 56 年・平成 10 年 2 学年を代表し、実行委員長として改めてお礼申し上げます。

望月 高行 昭和 59 年卒

大和市中央林間で耳鼻咽喉科医院を開業しております。2 年前より救護班の医師として母校、強行遠足のお手伝いをしています。

望月 紀彦 平成 3 年卒

我がクラスは旧校舎 3 階ど真ん中に位置していた教室！いつも空を眺めては漠然と夢に向けて数学と英語を解く毎日。卒後 22 年が確実に経ち、どうやら微力ながら社会に貢献している現在。やっと仲間に出会える。楽しみ！

原 万由子 平成 25 年卒

私は日進基金プロジェクトに参加して以前から興味を持っていた生物学分野の道に進みたいと強く思い、現在は東京工科大学の応用生物学部に通っています。この経験で得たことをこれからも生かしていきたいと思ひます。